

5 読者のひろば

漢詩紀行：「北京」

藤野 仁三*

今年（2006年）の9月下旬、日本ライセンス協会とLES Chinaが共催する「第二回日中共同シンポジウム」が北京で開かれた。第一回共同シンポジウム開かれたのが1997年—すでに9年が経っている。

今回のシンポジウムの詳細についてはいずれ本誌で報告されるであろう。ここでは日本側の一員として第一回と第二回のシンポジウムに参加した筆者が、今回の答礼宴で披露した自作の漢詩を紹介する。

寄答礼宴

秋分佳節宿燕京

此地愁心絶不生

莫惜故人今夜醉

十年果得復逢盟

仁三作（脚韻（京、生、盟））

秋分過ぎのこの佳季節に、かつての「燕京」いまの北京を訪れた。当地ではまったく里心が起こらない。だから古い友人よ、私に気遣いしないで飲んでくれたまえ。今夜は酔ってもよいではないか、十年振りにようやく再会の約束を実現できたのだから…。

このような大意であるが、読者の中にはなぜストレートに「秋分の佳節 北京に宿す」、「十年果たし得たり 再会の盟」と表現しないのか疑問に思う方もあろう。そうしたいのだが漢詩（近体詩）のルールではそれが許されない。七言絶句の場合、「燕京」、「逢盟」のところは平仄のルール上、平音の漢字を当てなければならない。「北」、「会」はともに仄音であり、ここでは使えない。

「燕京」の語は、詩の構成上もキーワードである。戦国時代の燕の国は積極的な人材登用政策を採った。「隗より始めよ」（劣る者から雇え）という故事が今でも残る。諸国から集まった有意の人材が長く燕に居ついた。それほど居心地の良い土地柄だという意味を承句に持たせている。

日本人が漢詩の本家で自作詩を披露するのはなかなか勇気が要ることである。中国側のまあまあの反応を見て、ひとまず安心した。聞くところによると、中国の若い世代は、名作を教科書で習うものの、漢詩を作ることはほとんどないという。いずこも古典の地盤沈下は歴然である。

写真は、標掲の詩を行書で書いてくれた石玉昌氏と一緒に彼のアトリエで撮ったもの。石玉昌氏は、背景画からも分かるように、画も巧みである。



「寄答礼宴」の書（右が筆者）

*東京理科大学専門職大学院 教授